

氏名(本籍)	かわのりえ(大分県)		
学位の種類	博士(心理学)		
学位記番号	博甲第2486号		
学位授与年月日	平成13年3月23日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	心理学研究科		
学位論文題目	高齢者のメタ記憶 —記憶に体する評価, 及び記憶方略の認知の検討—		
主査	筑波大学教授	教育学博士	太田信夫
副査	筑波大学教授	教育学博士	杉原一昭
副査	筑波大学教授	教育学博士	海保博之
副査	筑波大学助教授	博士(教育学)	茂呂雄二
副査	筑波大学助教授	教育学博士	田中喜代次

論文の内容の要旨

本邦における急速な高齢化に伴い、高齢者の記憶、学習に対する関心が高まり、高齢者に対する記憶研究が盛んに行われるようになってきた。そこで、本研究では記憶の中でも、とりわけ「自己の記憶能力や記憶行為についての評価、及び記憶課題、記憶方略についての知識」というメタ記憶に焦点をあて、高齢者のメタ記憶についての研究を行った。

第1章ではメタ記憶の理想的検討を行った。第1節第1項において用語としてのメタ記憶を述べ、第2項では、従来のメタ記憶研究におけるメタ記憶の定義・分野などを概観した。そして第3項において、本研究でのメタ記憶の定義を述べた。次に、第2節ではこれまでの子供のメタ記憶研究を概観した。また、第3節では主として欧米における従来の高齢者のメタ記憶の概観を行った。

第2章第1項では問題の所在、第2項において本研究の目的を述べた。本研究の主な目的は、高齢者が行う記憶に対する評価を測定し、その特性や関連要因との関係を明らかにすること、また、記憶に対する評価と実際の記憶成績との関係を検討することであった。加えて、高齢者の記憶方略の有効性の認知を明らかにし、記憶成績との関係を検討することも目的としていた。

第2部では実証的検討を行った。第3章では、メタ記憶の特性の解明、及びメタ記憶と記憶成績との関係の検討を行うことを目的とした。第1節【研究1】では、大学生から高齢者までを対象として、記憶に対する評価を測定できるメタ記憶尺度を作成することを行った。その際、一般的な日常生活という状況(一般メタ記憶)と、記憶テスト前(特定メタ記憶)という状況、すなわち、異なる2状況において高齢者と大学生のメタ記憶を測定した。因子分析を行った結果、「記憶に対する積極性」「記憶に対する自信」「記憶に対する不安」「課題特性の認知」「想起の失敗経験」の5因子が抽出された。

次に第2節【研究2】では、高齢者のメタ記憶の特性を明らかにするために、状況という観点からと、加齢という観点からメタ記憶の検討を行った。その結果、高齢者では記憶テスト前になると、「記憶に対する自信」は低くなるものの、「記憶に対する不安」は日常生活中と異なることが明らかになった。また、加齢の観点からメタ記憶の特性を検討した結果、高齢者は大学生よりも「記憶に対する自信」の評価が高いことが明らかになった。

次に、高齢者に対して記憶テストを行うために、高齢者の興味を持続させることを最優先させた記憶課題を作

成することを第3節【研究3】において行った。そして第4節【研究4】では、高齢者のメタ記憶と記憶成績との関係を明らかにするために、【研究1】のメタ記憶尺度と【研究3】で作成された単語リストを用いた記憶成績との関係を検討した。その結果、高齢者では記憶テスト前の「記憶に対する自信」と記憶成績との間には有意な負の相関が見られた。これは「記憶に対して自信があると評価するほど、実際の記憶成績が低い」ことを意味するものであった。

第4章【研究5】では、高齢者のメタ記憶と日常生活における認知活動との関係を検討することを目的とした。記憶、及び読書についての自己評価に関する質問項目を因子分析した結果、「読書志向性」「記憶と読書の関係認識」「想起の失敗経験」の3因子が抽出された。加えて、「読書志向性」と読書量、「記憶と読書の関係認識」と新聞購読時間に有意な正の相関が見られた。また、「読書志向性」と「記憶と読書の関係認識」にも有意な正の相関が見られた。

第3章の研究結果を鑑みると、高齢者のメタ記憶の中で、とりわけ「記憶に対する自信」において興味深い知見が見出されている。そこで、第5章では記憶に対する自信を「記憶の自己効力感」と言及し、検討することを行った。

まず最初に、第5章第1項【研究6-1】において、記憶の自己効力感尺度の作成を大学生を対象として試みた。そして、その尺度を高齢者において使用し、記憶の自己効力感と関係要因の検討を行った第2項【研究6-2】において、高齢者の記憶の自己効力感と記憶の失敗経験との間に有意な負の相関が見られた。また、記憶の自己効力感と記憶変化の認知においても、有意な負の相関が見られた。

次に第2節第1項【研究7-1】では、記憶テスト前の記憶の自己効力感と言語課題での記憶成績との間に【研究4】で見られたような負の相関がみられるかどうかを検討することを目的に、研究を行った。その結果、高齢者の記憶の自己効力感と言語課題での記憶成績との間には有意な負の相関、すなわち、記憶の自己効力感が高いと評価する高齢者ほど、記憶成績が低いことが示唆された。また【研究7-2】では、記憶テスト前の記憶の自己効力感と非言語課題での記憶成績との関係を検討することを目的とした。その結果、両者間に負の相関が見られたものの、その関係は有意ではなかった。

さらに第3節【研究8】では、高齢者の記憶の自己効力感に影響を与える要因を検討した。その結果、年齢が高くなるにつれ、記憶の自己効力感が高くなるということ、同じ年の他者よりも自己の記憶能力が優れていると評価するほど、記憶の自己効力感が高くなるということが明らかになったと言える。他方、現在の記憶能力を過去と比較した場合には、対象とした高齢者全員が「記憶能力は過去よりも衰えた」と評価するのだが、同じ年の他者と比較した場合には、対象とした高齢者の約90%が「同じ年の他者よりも記憶能力は優れている、または等しい」と評価することも示唆された。

実証的検討の最後である第6章では、高齢者の記憶方略の認知に関する検討を行った。高齢者と大学生を対象として、記憶方略の有効性の認知を検討した第1節【研究9】から、記憶方略の有効性の認知に関しては、高齢者は大学生よりもやや劣っていたと解釈された。さらに、高齢者は認知的コストが多くかかる記憶方略は有効であるとは認知していないようであり、単純に単語を繰り返すことが記憶を行うための最善の記憶方略であると把握している傾向が見受けられた。

次に第2節【研究10】では、記憶方略の有効性の認知と記憶の自己効力感、及び記憶成績との関係の検討を行った。その結果、記憶方略の有効性の認知と記憶の自己効力感との間には、有意な関係は見られなかった。また、記憶方略の認知と記憶成績との間にも有意な関係は見られなかった。

最後に第3部において実証的研究の総括を行った。第7章第1節では実証的検討を行った個々の研究において明らかになったことを記述し、第2節では本研究での問題点、及び今後の研究方針を明らかにした上で、今後の課題が考えられた。そして第3節において、高齢者を対象とした研究に対して、調査や実験の過程において感じたことや、現時点で考えていることなどを述べた。

審査の結果の要旨

本研究は、高齢者のメタ記憶について、実験や調査により種々の角度から検討を行っている。そして、記憶に対する自信と記憶成績との負の相関があること、同じ年代の他者との比較が自己効力感に正の影響を与えていることなど、いくつかの新しい知見を見出した。また、メタ記憶尺度や記憶の自己効力感尺度などの作成も行った。これらの研究成果は、いずれも学問的に高く評価できる。問題点としては、実験・調査の対象者である高齢者のサンプリングの妥当性、記憶課題の一般性などがあるが、この分野の日本における研究が緒についたばかりであり、今後のより精練した研究が期待されるところである。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。